

(第3回)

中
2025

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で23ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題の作成上、一部、表記を変えています。

一月、めずらしく京都に大雪がふった。

「へ X へ 寒だからねえ」

こよみさんがいった。

「一年でいちばん寒い日」

ベッドに横たわったまま、そうつぶけた。

咲はさつきまで雪のふりつづいた窓の外を見た。

じっちゃんの「そーふ」が、月桂樹の枝を長い植木ばさみで切っている。

「雪の仕事」

こよみさんがつぶやいた。

咲が顔を見つめると、

「あの月桂樹はどんどん上にのびて、下からはああして切れなくなっていたんだけど、雪の重みで枝がたれて、とどくようになったんだ」

「そっか。そやから、雪がやんだらすぐに、そーふは枝切りしだしたんやね。雪はそーふのお手伝いをしてくれたんや」

咲がそういったとき、切られた枝とともに雪がバサッとそーふの頭におちた。

「ふふ、あれは、雪のいたずら」

こよみさんがわらった。

前に咲はこよみさんから、「へ Y への仕事」のことも聞いた。庭に植えたはずのない草が生えていたら、これはどこからか種を飛ばしてくれたへ Y への仕事かもしれない、ということ。

また、別の日には、こよみさんは「時の仕事」といって、鍋に水や野菜、鳥肉を入れ、ストーブの上にかけておきながら、そのそばで、くつしたの穴をつくろつていた。そして、つくろいものがおわったとき、鍋のふたを開け、「スープのできあがり!」といった。

こよみさんは咲のばつちゃん、かあさんのかあさん。吉崎こよみという。三人きょうだいの末っ子のかあさんが結婚してからは、ずっとじつちゃんのそふとふたりで、同じ京都市内だが、咲たちの家からバス、地下鉄を乗りついで小一時間ほどの東の町、山科にすんでいた。五十五歳まで小さな会社の事務員として働いて、あとは、読書と日々の手仕事で生きていた。

「今が肝心! その今を季節の中で感じて生きていくこと、これがたいせつなんだ。その人のもとをつくる」こよみさんの口ぐせだ。

「そのためには、手仕事がいちばん」

そういって、こよみさんは、秋ならカリン酒、夏なら梅干しやラッキョウづけなどをつくっていく。一休みのときにのむお茶の葉もつくっていた。

咲も手伝ったことがある。庭にある三本の茶の木から葉っぱをつむ。ドクダミを根元から切り、干す。柿の葉をつみ、蒸し、干す。そして、それらをまぜあわせるのだ。クマザサやカラスノエンドウがまざっているときもあった。去年の五月から六月にかけて何度も咲はひっぱり出された。そのとき、こよみさんは、

「今年は助っ人がいて、大助かり。猫の手よりも上等」

そういって、一つの瓶をくれた。

「虫にさされたとき塗ると、かゆみがとれるよ。虫さされ薬」

瓶にはドクダミの白い花だけがたくさん、※₁ ホワイトリカーの中にはいつていた。

「けっ、虫さされ薬やて、虫にさされるための薬みたい」

二つ上のにいちやんの啓がにくまれ口をたたいたが、夏に蚊にさされたとき塗ると、よく効いた。

そのこよみさんが亡くなった。ついこの間、二月の末に。

気持ちの強い人だった。お酒が好きだった。おしゃれだった。ガンが見つかったから、すべて用意をととのえて消えていった。死亡通知も、日付だけを空けておいて、自分で書いてあった。文面はかんたんだった。

すばらしい人生でした。

めぐりあった人がよかった。

ありがとうございます。

亡くなったのは六十六歳だった。まだ若いのになあ、とたいていの人という。咲が十一歳だから、五十五ちがう。引き算をして、ちよつと考えた。こよみさんになるまであと五十五年。五十五年つて、どのくらいなんだろう。これから先の五十五年なんて、咲には、永遠のような気がする。そして、咲がその年になっても、こよみさんがいないのではそれこそ永遠に追いつけない、と考え、咲の頭はくらつとした。

③ こよみさんは「あつさり、さつぱり、きつぱり」生きていた。いろんな人がそういつてほめ、通夜に集まった人びとがそのたびにうなずいた。

その場にそーふはいなかった。

「いいから、全部わたしたちがするし」

かあさんはそういい、つらくて立ち上がれないそーふをそのまま二階の部屋^{へや}にのこし、かあさんの兄^{せう}がお葬式^{そうしき}をとりしきった。

「父はここに出ることができません。じつとひとりで母をしのんでおります」

光^{こういち}「おじさんはそうあいさつした。

咲^{さき}は、このばっちゃんを「こよみさん」と呼^よんでいた。《A》ずっと、こよみさんと呼^よんでいたので、五歳^{さい}のある日、こよみさんから、

「知^しってる？ わたしは咲^{さき}のおばあちゃんなの。咲^{さき}のかあさんのかあさんなんだよ」
そういわれたときはびっくりした。

「そぼ、つていうんだよ」

「そぼ？」

「そう」

「そーぼ」

咲^{さき}はそつと呼^よびかけた。

「でね、沢次^{さわじ}さんはそふ」

「へえ」

「緑子^{みどりこ}は、はじめはみどりこ。で、咲^{さき}のおかあさんになって、母、かあさんね」

「じゃあ、つぎはそぼ？」

「さあ、それはどうかな。咲や啓さきによるね」

そういつて、こよみさんは、咲さきの頭かぶをなでながらつつけた。

「わたしは、祖母そぼになれたけど、これはありがたいことなんだね。ありがとう」

こよみさんはこよみさんのままだったが、「そーふ」という呼び名なはこのときからはじまった。《 B 》

咲さきはこよみさんがちよつと苦手にがてだ。きらいなのではない。ちよつとおつかない。いや、そうではない。緊張きんちようするのだ。かあさんという。いつもきりきりしやんとしているなあ、と。だからなのかもしれない。クラスくらすの仲良あそこしの浅子あさこにもおばあちゃんがいる。いつもにこにこしていて、感じがぜんぜんちがう。それでも、咲さきはこよみさんにひかれる。なんでだろう。

それは、たぶん、こよみさんがつかう「ことば」なのだ、と思いあたった。こよみさんは魔法まほうのように、ことばをその場にぴたり合わせてつかう。そうすると、咲さきは心がしんとおちつくのだ。咲さきにとってはふしぎな魔法まほうだった。

こよみさんをそう思うようになったのは、こんなことがあったからだ。

ある日、こよみさんは起き※上がりこぼしのおみやげをもって咲さきの家うちにやって来た。まゆだままゆだまでできたそれを何度もころがしては起き上※がらせ、そのたびに、こよみさんは、

「④ けなげなやつだなあ」

そういつた。

そうか、これを、「けなげ」というのか、と咲さきは思った。《 C 》

それから、アリがせつせとえさをはこぶところやアサガオが種たねからちゃんと芽めを出したのを見ると、「けな

げなやつちやなあ」と、咲はつぶやいてしまう。こよみさんがつかうことばは、いつも「あつ、これがそんなか」というそのときの様子とぴったりかさなるのだ。

「せつない」も「さりげない」もそうしておそわった。

そーふが近くの友だち、といつてもそーふよりうんと年上の友だちの家に行つて、夕方になつても帰つてこないで、心配になつたこよみさんと咲とにいちやんがむかえに行つたときのことだ。

「いやあ、話がはずんで、長くひきとめてしまつて」

その人はいいながら、なにか用事があるかのようにそのまま門の外に出てきて、咲たちが見えなくなるまで見送つてくれた。

「ああして、さりげなく見送られると、うれしくなるし、^⑤せつなくなるねえ」

夕暮れの中、^⑥自分の胸をだきしめるようにこよみさんがいったときも、咲はすぐうなずいた。

（Ⅰ）、その気分も、とつとと先を歩いていったにいちやんが、「バイバイ」と大声を出し、ぶちこわしになつてしまつたが。

そんなこよみさんだが、そーふがいないと、こよみさんとはなにを話していいのかわからない。こよみさんから機嫌をとるように話しかけてくれるということはない。（Ⅱ）、いつも本を手に行っているか手仕事をしているかのこよみさんに話しかけることがむずかしい。

一方、そーふは、山科の家に行くといつもいつしよになにかしてくれる。そーふは三年前定年で会社をやめた。今はときどき、大学に教えに行く。クマムシの研究をしているが、教えるのはそれではない。会社でやつていたデータにもとづく市場調査のやり方。統計学という学問だそうだ。それを聞いたとき、

「クマムシを教えたらええのに。ちなみに、おれやつたら、ダンゴムシの生態を教えるのになあ」と、にいちや

んはいった。

「ちなみに」は、にいちやんがなにか特別にいうときの決まりことばだ。《D》そしてダンゴムシもにいちやんのお気に入りなのだ。

「足は十四本もあるんやで。子どものときは十二本、これもおもしろいやろ。大人になると、ふえるんや」

「そうか、ダンゴムシか。そりやいいなあ。ダンゴムシもクマムシも昆虫ではないんだもん」

⑦ そーふはわらつていった。

昆虫ではないクマムシは、「緩歩動物門」という種類の生きものだ。ちなみに、ダンゴムシはエビやカニと同じ「甲殻類」の仲間だそう。

はじめてクマムシを虫眼鏡でみせてもらったときはびっくりした。苔の下から出てきた。四対の足でめつくりと歩く。クマのようにのっしのっしと。一ミリにもみたくないのに。

そーふは命あるものならなんでも好きだ。いろんな小さな生きものや木や草をそだてている。だから、にいちやんも咲もそーふの家に行くのがたのしみなのだ。

そーふは「生きものがかり」。こよみさんはそのそーふの生きものにかこまれて、本を読んだり、手仕事をたのしんだりして、そのときどきの心とぴったりのことばをつかうから、「魔法つかい」ならぬ「Z」つかい。咲はかつてにそう決めた。

「そう、咲は十一歳になったの」

咲がケーキを食べ終わったとき、こよみさんはいった。さつきもいった。

この間の「X」寒後の一月の咲の誕生日の日だった。

亡^なくなるひと月ほど前の日曜日だった。

「そう」

またつぶやいて、こよみさんはなにか考えこんだ。

咲^{さく}もだまったまま、きのうのことを考えた。

春休みに学校では絵のコンテストがある。きのうは、そのクラス代表を決める日だった。

咲^{さく}はえらばれたかった。絵のテーマが好きな動物だったからだ。カバを描^かきたかった。耳の内側がピンク色のカバ。投票用紙に自分の名前を書こうとして、やめた。そうまでして出たいのか、と思った。えらばれる、ということとは自分以外の人たちから推^おされなければ意味がない、と思った。

で、結局えらばれなかった。くやしかった。そのときだった。浅^{あさこ}子が「おしかったね」といった。ほほえんだように思えた。むしろように腹^{はら}が立った。返事をしなかった。そして、ずっとそのことを浅^{あさこ}子にあやまらないままにしている。

「咲、咲^{さく}さん」

こよみさんに呼^よびかけられた。

われに返った咲^{さく}はこよみさんを見つめた。

⑧ 「咲、散歩に行こう」

いうなり、こよみさんは、「よつこらしよ」とつぶやいて、ソファからゆつくり立ち上がった。

そのころ、こよみさんのからだの調子はまだおちついていていた。ベッドにいたことが多かったが、少し長い入院のあと、退^{たい}院^{いん}して、ゆつくりとそーふとの暮^くらしをつづけていたのだ。最^{さい}期^きは家で、ということだったのかも
しれない。それでも、遠出はむずかしい。

だから、誕生日には去年までならそーふとこよみさんが咲さの家にやつて来たのだが、今回は咲さの家族が出かけることにした。とうさんも、きちんと休みをとった。日曜日でも、仕事関係の用事で会社に行くことがあったのに。

「よし」

そーふも立ち上がった。

「気をつけて」

かあさんが台所からいった。

とうさんとにいちやんがラグビー中継ちゅうけいを見ながら、「いつてらっしゃい」とそろって声をかけた。

(吉田道子『草の背中』より)

(注)

※1 ホワイトリカー 果実酒を作るために必要なアルコールの一種。

※2 起き上がりこぼし だるまの形などに作った人形の底に重りをつけて、倒れてもすぐに起き上がるようにしたおもちゃ。

問一 (X)に入る漢字一字として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一 イ 極 ウ 小 エ 大

問二 (Y)に入る漢字一字として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 波 イ 花 ウ 風 エ 虫

問三 ――部①「肝心」、④「けなげ」、⑤「せつなくなる」の意味としてもっともふさわしいものを次から選び、

記号で答えなさい。

①肝心

ア 関心を持つこと

イ 特別に思うこと

ウ とりわけ大事であること

エ しつかり体調を整えること

④けなげ

ア 懸命に取り組もうとする様子

イ 計画的に進めようとする様子

ウ 気力だけでどうにかしようとする様子

エ 途中であきらめてしまう様子

⑤せつなくなる

ア 怒りのあまりつい手が出てしまいそうな気持ちになること

イ 辛くてすべてが嫌になってしまいそうな気持ちになること

ウ 寂しさで胸がしめ付けられるような気持ちになること

エ 悲しくてやる気がおきないような気持ちになること

問四 — 部②「猫の手よりも上等」とあるが、「猫の手」という語句を使ったことわざとして正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 猫の手に小判 イ 猫の手も借りたい ウ 猫の手にも衣装 エ 借りてきた猫の手

問五 — 部③「こよみさんは『あつさり、さっぱり、きっぱり』生きていた」とあるが、このような性格であることが特によくわかるこよみさんの具体的な行動を表している二文を本文から抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。ただし、句読点を含みます。

問六 本文には次の文が抜けている。この文を入れるのにふさわしい箇所をA～Dの中から選び、記号で答えなさい。

こよみさんがつかったことばの中で気に入って、今ではひんぱんにつかう。

問七 — 部⑥「自分の胸をだきしめるようにこよみさんがいったときも、咲はすぐうなずいた」とあるが、咲がすぐにうなずいたのは、こよみさんがことばに対してどのようにとらえていると思っているからか。そのことがわかる部分を本文から探し、解答らんに合う形で、本文から十五字で抜き出して答えなさい。

問八 (Ⅰ)、(Ⅱ)に入る接続詞を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ちなみに イ そのうえ ウ だから エ ようするに オ たとえば カ しかし

問九 ――部⑦「そーふはわらっていた」とあるが、なぜか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア にいちゃんが特別なことを言うときには必ずダンゴムシの話をするので、そーふはもうその話に飽きていたから。

イ にいちゃんがお気に入りのダンゴムシについてよく調べ、生き生きと話す姿を見て、そーふは嬉しくなってきたから。

ウ にいちゃんから聞いたダンゴムシの足が大人になると増えることをそーふは知らず、自分の知識不足を恥じたから。

エ にいちゃんがダンゴムシの生態を教えると言ったことに、そーふも全く同じ考えを持っていたことに面白いと感じたから。

問十 (Z)に入る語を本文から三字で抜き出しなさい。

問十一 ――部⑧「咲、散歩に行こう」という呼びかけから、こよみさんのどのような気持ちが伝わってくるか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア こよみさんのリハビリのための日課となっている散歩へ咲を誘おうとする気持ち

イ このまま家にいると咲が何か問題を起すかもしれないと心配する気持ち

ウ 今すぐに浅子の家へ行って謝らせなければならぬと焦る気持ち

エ 何か悩みを抱えている咲を気晴らしに連れて行こうとする気持ち

問十二 この文章を授業で読んで、授業の中で生徒たちがそれぞれ感想を言い合い、最後にMさんが代表して、クラスで発表しました。後の問いにそれぞれ答えなさい。

生徒の感想

生徒A 文章を読んで、私はこよみさんの生き方がとても素敵だと思いました。いろいろなことを「仕事」として表現していることから、こよみさんが自然の中で生きるために、自分の役割を大事にしていることが伝わってきました。

生徒B 私もこよみさんの考え方はとても魅力的だと思いました。対照的に統計学だけを大事にしているそーふの姿も印象的で、咲がそんなそーふが苦手で、会う時にいつも緊張するのきんちやうも仕方がないと思いました。

生徒C 本を手に行っていることが多いこよみさんどのような会話をしたらよいかわからない咲の姿が印象に残りました。でも、そーふがいることで、こよみさんと咲はうまくやりとりができていたのだと思います。

生徒D 咲自身がこよみさんにひかれているのがよく伝わってきました。こよみさんの方から咲の機嫌きげんをとるように話しかけることはなくても、咲の気持ちをくみ取ろうとしているこよみさんの姿から、二人の関係性が絶妙で興味深いと思いました。

Mさんの発表

今回、この作品を読んで、私は亡くなった祖母のことを思い出しました。祖母は、自然豊かな所に住んでいて、祖母の家に行くのを私はいつも楽しみにしていました。夏には虫取り、冬は、大みそかの日に家族みんなでおそばを食べ、祖母と一緒におせち料理の準備をし、独楽こまやすごうくで遊ぶのが楽しみでした。

本文の中でこよみさんは、今を感じながら生きるには（①）を意識することが大切であると言っていました。私も祖母の手伝いを通して、「今」というものを感じられた気がします。祖母から教わったことをこれからも大事にしていきたいと思います。

- （１） 生徒の感想のうち、間違まちがっていることを言っている生徒を一人選び、記号で答えなさい。
- （２） 空らん①に入る適切な語を本文から漢字二字で抜き出しなさい。

二次の文章 A・B を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章 A】

この世の中に色々のものがあるのは、みんなそれぞれに、なんらかの意味において、あらねばならないからであろう。この世の中に存在するあらゆるもの、それはそのあるがままにおいて可とせられ、祝福せらるべきはずのものであろう。

この世の中のありとあらゆるものが、それぞれに自分としての形をもち、性質をもち、は、
なんと大きい真実であろう。

※1 路傍ろぼうの石ころは石ころとしての使命をもち、野の草は草としての使命をもっている。

石ころ以外の何ものも石ころになることは出来ない。草を除いては他の如何いかなるものといえども、草となり得ない。だから、世の中のあらゆるものは、価値的にみんな平等である。みんながみんな、それぞれに尊いのだ。みんながみんな、心ゆくままに存在していいはずなのだ。

私はこうしたことを考えるとき、①しみじみと生きていることの嬉しさが身にしみる。

そして、石ころは大地の上に憩いこい、※2 蛸げじは石ころの下に眠るように、一切のものはそのあるがままにおいて、自らに助合たすけあっているのだ。

ああ、だから「愛」こそは、自らにして、※3 万有存在ばんゆうの根底を流れている血であつたのだ。

そして、Ⅱとして、しかもその中の人間として生を与えられ、意識的にその愛を生活しようとする
私たちは、なんとという有難いことであろう。

（伊藤英治、市河紀子編『続 まど・みちお全詩集』より

問題作成にあたり、一部改変した部分がある）

(注) ※1 路傍…みちばた。

※2 蛸蛸…ムカデに似たゲジ科の節足動物。

※3 万有…宇宙にあるすべてのもの。万物。

【文章B】

いきものつて よくいえば

きびきび^②している ふざけていえば

ただの おつちよこちよいだ

いきてないものつて よくいえば

Ⅲ ふざけていえば

ねぼけたアホみたいだ

そのいしころと そのうえで

あたま なでまわしてるアリンコ

そのみずいれたコップと そこにさされた

※ ヨメナのはな これらがめっていると

いきものといきてないもののかんけいって

なにやら おくふかあいきがする

それもそのはず… とかみさまならば

③ おつしやりそうだ はるかなむかし

いきものはいきてないもののなかから

うまれでたんだ つまりいきてないものが

いきもののおかあさんだからだ

(まど・みちお『うめぼしリモコン』より)

問題作成にあたり、詩題は省略した)

(注) ※ ヨメナ：キク科の多年草で、道ばたで見かける野菊の一種。

問一

 に入るのにもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 互いに個性を認めずにいるということ

イ 人間が関係性を決定してゆくということ

ウ なるべく関わり合わないでいるということ

エ 互いに関係し合ってゆくということ

問二 ―部①「しみじみと生きていることの嬉しさが身にしみる」とあるが、それはなぜか。理由として間違っ
ているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世の中のあらゆるものは、価値的にみんな平等であり、「私」もそのうちの一人であると感じることがで
きるから。

イ 世の中のあらゆるものは、それぞれに使命があり、「私」もなくてはならない存在であると感じることが
できるから。

ウ 世の中のあらゆるものは、意識的に「愛」を感じて生活し、「私」も日常の中でその「愛」を感じること
ができるから。

エ 世の中のあらゆるものは、祝福されるべき存在であり、「私」もありのままで居ていいのだと感
じることができるから。

問三

Ⅱ

に入る語を、詩（文章B）の中から抜き出して答えなさい。

問四 ―部②「きびきび」の語の説明としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 動作が生き生きとして気持ちのよいさまを表す擬態語である。

イ 慌ただしい様子、忙しく動き回る様子を表す擬音語である。

ウ わずらわしいことがなくて、気持ちのよいさまを表す擬音語である。

エ 物事が止まることなく順調に進行するさまを表す擬態語である。

問五

Ⅲ

に入る語として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア てきばきしている イ なまけている ウ かたまっている エ おちついている

問六

——部③「おっしゃり」と敬語の種類が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 田中さんがうどんを召し上がった。

イ 佐藤さんはすでにご存じのようだった。

ウ 鈴木さんがこちらにおいでになるそうだ。

エ 私は高橋さんのご自宅にうかがう。

問七

この詩（文章B）の鑑賞として、あきらかに間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 詩全体に多く用いられているひらがなは、読みやすくやわらかな印象を受けるため、読者に親しみやすさを与える効果がある。

イ 第一連では、対応する語句を同じ組み立てで並べることで、リズム感が生まれ、印象を強める表現になっている。

ウ 第二連では、「いしころ」と「ヨメナのはな」を「いきてないもの」の具体例として書き、読者が想像しやすくなっている。

エ 第三連では、「いきてないもの」を「いきもの」の「おかあさん」とすることで、両者の関係性をわかりやすく伝えている。

三

次の俳句を読んで後の問いに答えなさい。

A ①五月雨の降りのこしてや光堂ひかりどう

松尾芭蕉まつお ばしやう

B 一枚の餅のごとくに雪残るもち

川端茅舎かわばた ぼうしや

C 戦争が廊下の奥に立つてゐたろうか

渡邊白泉わたなべ はくせん

問一 ―部①「五月雨」の説明としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 晴れの多い五月にたまに降る雨

イ 梅雨のころ、延々と降り続く雨えんえん

ウ 夏の夕方、突然激しく降ってくる雨

エ 晩秋から初冬にかけ断続的に降る雨ばんしゅう

問二 Bの句と同じように、直ゆが用いられている句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 涼風の曲がりくねってきたりけり

小林一茶

イ がんばるわなんて言うなよ草の花

坪内稔典つぼうち のり

ウ ペダル踏む白桃のような日暮れにふ

福富健男ふくとみ たけお

エ 金剛の露ひとつぶや石の上こんがう

川端茅舎

問三 Cの俳句では、昔使われていた言葉づかいとは違って、ふだん私たちが使用している話し言葉に近い言葉づかいが用いられている。こうした言葉づかいのことを、何というか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 口語 イ 漢語 ウ 雅語 エ 文語

問四 Cの俳句の鑑賞として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 歴史という長い時間の流れの中で、日本にも戦争があつた事実を抽象的に表現している。
イ 気づかないうちにいつの間にか日常に入り込んでくる戦争の不気味さを表現している。
ウ 戦争を二度とくり返してほしくない強い反戦の思いを、間接的な言い方で表現している。
エ 強制的に戦場へ送り出される戦争の無情さを、体言止めの技法を用いて表現している。

問五 A～Cの俳句の中から、季語がない句を一つ選び、記号で答えなさい。

四

次の各文で言い表していることわざや慣用句としてもっともふさわしいものを、次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 近所づきあい良かった彼があ的事件の犯人^{はんにん}だったなんて、本当におどろいた。
- ② あの不評だった商品がまさか大ヒットするなんてだれも思わなかったよ。
- ③ 今まですべてを許してきた彼女も、今回はかりは大声で怒^{おど}った。

ア 鶴^{つる}の一声 イ 釈迦^{しゃか}に説法 ウ 寝耳に水 エ 根も葉もない オ 仏の顔も三度まで
カ 瓢箪^{ひょうたん}から駒が出る キ 目は口ほどにものを言う ク 火のない所に煙^{けむり}は立たぬ
ケ 笛吹^{ふえふ}けども踊^{おど}らず コ 木を見て森を見ず

五

——部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 台風が九州を縦断^{しゅうだん}する。
- ② この薬には解毒^{かいど}作用がある。
- ③ 勇ま^{ゆう}しい戦いぶり。
- ④ 世界平和の必要性を説^{せつ}く。
- ⑤ 美しい所作^{し所作}を身につける。

六

——部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① リトマス紙がサンセイ反応を示した。
- ② ケーキをキントウに分ける。
- ③ 自分自身をリツする。
- ④ 大人になってもドウシンを忘れない。
- ⑤ 彼女はいつも同じケイトウの本ばかり読んでいる。

